



上水の水で産湯をつかい・・・

すずき ようこ
鈴木 庸子

ナポリオリエンターレ大学・政治学部講師

「4月9日に生まれたアントニオ、パパとママはあなたを心から愛してる」「今日地球にマリアンナと言う星が降り立った!」「エンツァの人生がバラ色でありますように」「ロベルト万歳!」なかには、「昨日生まれたカルミネ、君は間違いなく最高の色男(まだ会えていないけど)」という従姉妹の希望的観測や、同じ部屋に数年を挟んで2度お世話になり、無事2人の子供を出産したという家族の記録までが、産婦人科入院病棟の壁を埋め尽くしている。誕生と言う感動的なイベントへの寄せ書きと思えば、微笑ましくもある無数の落書き。夫が運んでくれた入院用具を整理したあと手持ち無沙汰に日付を確認してみると、2002年まで辿れた。かれこれ5年は塗り替えされていない、明るい誕生賛歌に満ち満ちた薄汚れた壁に囲まれた空間には、ぞんざいに扱われた傷みが目立つベッド、食事用のテーブルが付いた小さな引き出しがそれぞれ3台。小学校用と思われる古ぼけた机が1台、イスが数個。事務的なそっけなさのクローゼットが入り口近くにあるものの、鍵がかからないためか誰も使おうとしない。ユニットバスのシャワーは、排水溝が詰まっていて、しばらく使われた形跡もない。効きすぎた冷房に、道

路に面した窓を開ければ、ナポリの喧騒と道路工事の爆音が、アフリカからの風に特有のうだるような熱気とともに押し寄せてくる。

テレビ、電話はおるか、ベッドの間を仕切るカーテンすらない。「ガードマンの話だと、昔はあったんだって。でも、どうせ使い古したガラクタだっただろうに、とにかく何か持ち帰らなきゃ気がすまない人っているのよね。補充しても補充してもなくなるもんだから、病院も業を煮やして補充をやめたらしいわ」そういうことを防ぐためにも雇われている人物にしては、全く他人事のような話し振りだったと、姑がため息混じりに報告してきた。彼女は、入院患者用の食事のあまりの貧弱さにいたたまれず、お弁当を作って日参してくれていた。「看護婦にシャワーの排水溝のこと話したら、『水道修理工に電話しておく』ですって。あの調子じゃいつになるかわからないから、明日とりあえず洗剤とゴム手袋持って来るわ」

同室となった2人は、病院に着くや否やめでたく第二子を産み落とした22歳と、切迫流産の疑いで救急車で担ぎこまれた18歳。面会時間となれば、前者には10人程の親族が押しかけ、規定の時間を超過してガードマンに追い払われるまで、新生児



を囲んで世間話に余念がなく、後者は仕事で面会に来られない同棲相手を携帯電話で延々なじる合間に、私よりも若い母親に当り散らしと、賑やかなことこの上ない。

予定日を10日過ぎた時点で、大事をとって入院した私は、出産の兆候を待つのみ。胎児ともども元気なので、朝の回診と朝夕の分娩監視装置での胎児の心拍数・陣痛の強度等のチェック以外は、ベッドに在る必要もない。持ち込んだ雑誌や新聞を隅々まで読みきった3日目、院内に売店も喫茶室もないことを確認してから、気晴らしに中庭におりてみた。中央に位置した小さな噴水付きの池に、よく肥えた金魚が群れをなしている様子には心も和む。隣にやってきた看護師が、餌を与え始めた。金魚の旺盛な食欲に応え、膨らんだポケットから彼が次々と引っ張り出しているのは、我々の朝食であるクラッカー。木陰では母猫と子猫2匹がじゃれあい、その横にはキャットフードが山盛りになっている。病人食らしく味付けがゼロなため、コンディションの悪い状態で冷凍・解凍された魚に特有の味とにおいに否が応でも気づかされる蒸し舌平目を思い出す。一度食べたら誰も欲しがらないので、常に大量に余っているはずだが、

あれこそまさに猫またぎ、か……。

池を離れて中庭を進むと、いつの間にか外に出ていた。この際と主人を呼んで、ドライブに出かける。ジェラートを食べ、海辺を散歩し、結局半日も留守にしたが、病院側が私の脱走に気付いた様子はなかった。私がお世話になっている病棟から、2ヶ月程前、超音波検査機3台のうち最新型の2台が消えてしまったことにも納得がいく。

教会をベースとする中世の複合施設を改造した、由緒ある公立総合病院。産婦人科の科長はナポリでも1・2を争う名医の誉れ高く、新生児用集中治療設備も整っている。この町でも飛び切り問題地区の入り口に位置するという地理的条件とそれに伴うタフな環境は、定期健診の度に目の当たりにしていた。しかし、医師として、また人として信頼できる主治医の存在は、出産病院選択の際、私の中で絶対の位置を占めたのだった。

ベッドナンバーは、迷信深いといわれるこの町が幸運のシンボルとする13番。昨年夏の終わりに、私はここで無事第一子の誕生を迎えた。